新見市男女共同参画情報紙

りぼん

vol.15
2013.2

参画宣言

備えあれば憂いなし
～男女共同参画の視点から見た防災～

今回のりぼんでは、「男女共同参画を通して防災を考える」をテーマに、
日頃から防災について取り組まれている方々にインタビューを行いました。

別冊

「新見市栄養改善協議会」へのインタビュー

新見市栄養改善協議会　中川　初美さん

食べることは生きること 新見市栄養改善協議会とは…

食育の推進や、食生活の改善を通して地域住民の健康づくりを進めることを目的として活動しているボランティア組織です。

「食べることの大切さ」を啓発し、自立することを目標にした出前教室などを実施しています。

Q 防災について取り組まれていることは？

災害時には、隣近所など地域でお互い助け合うことが重要になってきます。そのため、日頃から食を通じた「一皿運動（おすそわけ）」を推進し、地域のつながりがより深くなるよう働きかけをしています。

また、災害時を想定し、ガス・電気などが使用不能となった場合でも、誰でも簡単に調理可能なサバイバル料理のレシピを発行する予定にしています。

Q 協議会の取り組みと男女共同参画のかかわりについては？

災害時において、食は最も大切なことで、食べることは生きることにつながります。男女を問わず、自分の食を守ることの重要性を改めて確認していただけるよう、取り組んでいきたいと思います。さらに、自分の食だけでなく、家族の食、近所の食、多くの人の食、と重要性を広めていきたいと思います。

また、「栄養改善協議会」と言うと女性委員だけをイメージされると思います。しかし、実際には男性委員もおり、女性とは異なった視点で活性化されています。近年では、当協議会の活動を通じて、食への男性の積極的な参加が増え、大変喜ばしいことです。

「高尾連合町内会」へのインタビュー

世代を超えて防災に取り組む 高尾連合町内会とは…

高尾地区の町内会が集まってできた組織で、高尾自主防災組織を立ち上げるために中心となって活動しています。現在、高尾公民館・高尾小学校・ＰＴＡなどと連携し、火災や水害が起きた時の避難訓練や自主防災活動を行っています。また、平成25年度を目標に自主防災組織を立ち上げる予定で協議を重ねています。

Q 自主防災組織を立ち上げようと思ったきっかけは？

東日本大震災など近年の災害において、自主防災組織などがきちんと整備されていて協力体制が整っている地域では、生存率が高い傾向にありました。高尾地区では昭和47年の豪雨でかなり被害を受けていますが、いつ、同じような豪雨で、被害に遭うかわかりません。被害を少しでも小さくしたいと思い、自主防災組織の立ち上げを決めました。

高尾連合町内会　宮地　昇さん

Q 今後はどのように活動していきたいですか？

現在、昭和47年の災害の状況を知っている人は非常に少ないため、我々のような世代が、若い世代に伝え、昔と今の土地の状況の違いや危険地域などを、高尾地区の全員にきちんと知ってもらいたいです。そのため、地域のつながりやふれあいを大切にし、世代を超えて一丸となれるよう、働きかけをしていきたいと思います。

また、災害時のマニュアルや防災マップなどを作成する際には、町内会の婦人部など女性の方の意見も取り入れながら、みんなで進めていきたいと思います。

「新見市消防署消防士」へのインタビュー

新見市消防署　福島　英樹さん

協力体制は不可欠 福島さんは…

東日本大震災の発生直後に被災地に行き、支援活動を行いました。現地では、主に介護施設や病院で被災した患者さんの受け入れ先の病院への搬送を担当しました。

Q 防災に対する心構えは？

岡山県内は災害が少ない地域であるため、防災に対する意識が比較的低いのが現状です。日頃から防災意識を持ち、災害に備えなければなりません。また、家庭での備えも大事ですが、災害時には、地域で相互に協力することが不可欠となってきます。常日頃から地域活動などでコミュニケーションをとっておくことも重要です。

Q 支援活動で感じたことは？

災害時に迅速に支援を行うためには、地元をよく知っている方々との協力が大事です。不慣れな土地で活動する中で、日頃から地域に密着して活動している地元の消防団の存在は、非常に大きく感じました。

また、支援活動は一般的には男性の役割という印象が強いですが、女性でしかできない役割があるのも事実です。最近では、女性の消防士も増えてきており、被災された女性の心と体のケアや、デリケートな部分での問診など、非常に大きな役割を担っています。男女とも、それぞれの役割を担い協力することの大切さを感じました。

新見市消防団東部分団女性部のみなさん

「新見市消防団東部分団女性部」へのインタビュー

地域は自分たちで守る 新見市消防団東部分団女性部とは…

平成23年度に新たに発足した組織です。現在、男性の部長1人と女性団員25人で構成されており、豊永・草間・土橋・足見を担当しています。

Q 防災について取り組まれていることは？

全国火災予防週間中には、豊永のふれあいセンター満奇で可搬ポンプを使用し、実際に川から水を汲みあげて放水訓練を行っています。また、地区の芸能祭や敬老会での火災予防啓発の寸劇、高齢者宅を訪問しての声掛け、火災報知器設置の啓発、家庭の電話機近くに貼る119番通報ステッカー配布など地域に根ざした予防啓発活動を行っています。

Q どのような想いで活動していますか？

女性・男性にかかわらず、「自分たちの地域は自分たちで守るんだ。」という意識、気概を持って活動しています。火災、自然災害が発生した際には、子ども、高齢者に寄り添いたいと感じて

います。

また、年間を通じて活動回数は多いので、家族の理解や協力があってこその活動であると思っています。家庭内での助け合いができないと消防団活動も成り立たないので、家族には感謝しています。また、地域の方から感謝の言葉をいただくのは活動を続けるうえで励みになります。

取り組みの様子を紹介します！

新見市消防団東部分団女性部では、防災啓発活動の一環として、ペープサート劇(*)を行っています。今回は、11月15日に草間台小学校で火遊びの禁止、自分に引火した場合の火の消し方、火災が発生した場合の避難のしかたなどについて、劇を通して啓発しました。

*人物の絵などを描いた紙に棒をつけ、動かして演じる劇のこと。

裏は、こんな風になってます。

ちょっとひとこと

これまで、我々は、大きな自然災害に直面した直後は防災に対する意識が高まっているが、時間の経過とともに、その思いはだんだんと薄れていってしまう。ご多分に漏れず、私もその一人だ。阪神大震災、鳥取西部地震、そして平成23年3月11日に起こった東日本大震災。自然の猛威に対していかに人間が無力かを改めて実感させられた。日常が非日常に変わってしまった。あれから2年の歳月が経とうとしている。常日頃から防災のことを考え実行し続けている人が何人いるだろうか。時に災害を教訓に人は何をすべきかを考える時間も必要であると感じる。

今回、インタビューに応じてくださった個人、団体の方々は防災に関する意識が高く地元での啓発など地域に根ざした活動をおこなわれており、大変、頭の下がる思いがした。

人は一人では生きてはいけない。男女を問わず、協力、思いやり、やさしさ、感謝の気持ちを持って他人に接することが大切であるとのメッセージが伝わってきて大変心温まる思いがしている。

話は変わるが、去年の春、久しぶりに友人と瀬戸内海のイカダ(釣りイカダ)に釣りに出かけた。その日は、蕪村(ぶそん)の俳句よろしく、穏やかな凪の日だった。すると突然、今までにない強い引きが私の竿を大きくしならせた。何が釣れたのかと友人や同じイカダにいた釣り人が駆け寄ってきた。

何分、格闘しただろう。魚の動きが止まってしまった。どうも、イカダを固定している錘(おもり)のワイヤーロープに絡まったらしい。あきらめ半分の私を尻目に、友人は携帯を片手になにやら船宿に連絡をしている。程なくして船宿の船長がやってきた。しかも、潜水夫を伴って。呼ぶ方も呼ぶ方だが、来る方も来る方である。港では、どんな大物が釣れたのかと騒ぎになっているらしい。もう、後には引けない。是が非でも、まだ見ぬ大物を釣り上げねば…。物々しい装備をした潜水夫がイカダの下に潜っていった。竿を持つ手にも力が入る。が、次の瞬間、竿が軽くなった。私はすべてを悟った。当たり前である。かれこれ1時間をゆうに過ぎようとしているのだ。どの世界にそんな悠長な魚がいるものか。大物であったであろう魚とともに潜水夫代(税込み26,250円)が海に溶けた。

友人のおせっかいに感謝しつつも恨めしく思った。

そんな私の心中を察したのか、帰り道、夕食をごちそうしてくれた。ファーストフードだった。ケチ！だけど、そんな、なにげないことが嬉しく思えた。

夜空を見上げふと思った。何の変哲も無いこんな日常がずっと続きますように。